令和４年度
事業報告書

（令和４年４月１日～令和５年３月 31 日）

学校法人青森山田学園

令和５年４月１日

１．法人の概要

１－１　設置学校

設置学校等	校長等	所在地	設置学部・学科等
法人本部	理事長　岡島 成行	青森市幸畑 2-3-1	
青森大学	学長　金井　一頼	青森市幸畑 2-3-1 (東京キャンパス) 東京都江戸川区 清新町 2-10-1 (むつキャンパス) 青森県むつ市金谷 1-10-1 下北文化会 館 2F	総合経営学部　経営学科 社会学部　社会学科 ソフトウェア情報学部 　ソフトウェア情報学科 薬学部　薬学科
青森山田高等学校 全日制課程	校長　花田 惇	青森市青葉 3-13-40	普通科 ・特進コース ・キャリアアップコース ・吹奏楽コース ・美術コース ・演劇コース ・スポーツコース（アドバンスクラス、スタンダードクラス） IT ビジネス科 自動車科 調理科
青森山田高等学校 通信制課程	校長　花田 惇	(青森校) 青森市幸畑 2-3-1 (札幌校) 北海道札幌市豊平区 旭町 4-1-40	普通科
青森山田高等学校 自動車専攻科	校長　花田 惇	青森市大字大矢沢字 野田 134-5	
青森山田中学校	校長　花田 惇	青森市青葉 3-13-40	
呉竹幼稚園	園長　湯沢 あけ美	青森市松原 2-15-2	
螢ヶ丘幼稚園	園長　越後谷 絹子	青森市赤坂 1-27-9	
北園幼稚園	園長　尾﨑 惠子	十和田市西二十一番 町 68-53	

青森県ヘアアーチスト専門学校	校長　西村　政孝	弘前市大字表町 6-4	理容科、美容科 (昼間課程、通信制課程)

１－２　建学の精神

校訓として「誠実、勤勉、純潔、明朗」を掲げ、さらに「文武両道」を教育目標として進めてきた。実践的な能力を持つ人材の育成を通じて、地域社会に貢献することを本学園建学の精神として進めている。

１－３　青森山田学園の沿革

年月	沿革
大正　７年　４月	創立者山田きみ裁縫塾開設
昭和　６年　３月	青森家政学園設立
昭和　８年　３月	実業学校令　山田高等家政女学校認可
昭和２３年　３月	財団法人山田学園設立
昭和２３年　４月	山田高等学校開設
昭和２６年　３月	財団法人組織変更、学校法人山田学園となる。 山田きみ理事長就任。高等学校男子部認可
昭和３５年　４月	呉竹幼稚園開設
昭和３６年	創立者山田きみ理事長逝去、田沼敬造理事長就任
昭和３７年　１月	学校法人山田学園を学校法人青森山田学園と改称
同　４月	青森短期大学商経科第一部開設
昭和４０年	山田繁弥理事長就任
昭和４１年	木村正枝理事長就任
昭和４１年　４月	青森短期大学商経科第二部開設
昭和４３年　４月	青森大学経営学部経営学科開設
昭和５３年　４月	十和田幼稚園開設
昭和５５年　４月	北園幼稚園開設
昭和５６年　４月	青森大学社会学部社会学科開設
昭和５７年　４月	青森山田高等学校自動車専攻科開設
昭和６０年　４月	螢ヶ丘幼稚園開設
平成　４年　４月	青森大学工学部電子情報工学科、情報システム工学科、生物工学科開設
平成　９年　４月	青森大学経営学部産業学科、社会学部社会福祉学科開設
平成１０年　４月	青森山田高等学校通信制課程開設
平成１１年　４月	青森大学大学院環境科学研究科環境管理学専攻、環境教育学専攻開設（修士課程）

平成１２年　４月	青森県ヘアアーチスト専門学校開設
平成１３年　４月	青森山田中学校開設
平成１４年　４月	青森大学工学部電子情報工学科を電子システム工学科へ 名称変更
同	同経営学部産業学科を産業デザイン学科へ名称変更
平成１４年　７月	木村隆文理事長就任
平成１６年　４月	青森大学薬学部医療薬学科（４年制）開設（工学部生物工学科を改組）
同	同ソフトウェア情報学部開設（工学部電子システム工学科、情報システム工学科を改組）
同	同経営学部産業デザイン学科をビジネス情報学科へ名称変更
同	青森短期大学商経科をビジネス創造学科へ名称変更
平成１８年　４月	薬学部薬学科（６年制）開設
同	青森短期大学ビジネス創造学科を地域創造学科へ名称変更
平成１９年　３月	十和田幼稚園廃止
平成２０年　３月	青森大学経営学部ビジネス情報学科廃止
平成２１年　３月	青森大学工学部廃止
平成２１年　３月	青森短期大学商経科第二部廃止
平成２３年　５月	青森大学薬学部医療薬学科（４年制）廃止
平成２３年１１月	木村隆文理事長逝去、木村雅大理事長代行就任
平成２４年　４月	盛田稔理事長就任
平成２５年　３月	青森大学大学院、青森短期大学廃止
平成２６年　４月	岡島成行理事長就任
平成２７年　３月	青森大学社会学部社会福祉学科廃止
平成２９年　４月	青森大学経営学部を総合経営学部へ名称変更
平成３０年１０月	青森山田学園１００周年、青森大学５０周年記念式典開催
平成３１年　４月	青森大学東京キャンパス開設
令和　元年　４月	青森大学ねぶた健康研究所開設
令和　４年　４月	青森大学むつキャンパス開設

１－４　基本理念、教育目標、教育方針

【青森大学】

基本理念

・青森の豊かな自然と文化の中で人間性と確かな教養を培い、社会に役立つ基礎学力、技術及び専門知識を身に付けさせるための実践的な教育を行う。

・教員と学生の親密なコミュニケーションを通じて、教員が個々の学生の能力を十分に引き出すための親身な指導を行う。

・大学の知的財産を活用することにより地域への社会貢献を行うとともに、地域との親密な交流を通じて地域から愛される大学となることを目指す。

【青森山田高等学校　全日制課程】

教育目標

・互いを尊重しあい、協働して社会を造りあげる品性のある人間形成を目指す。

・自らの力で未来を切り拓く、個性豊かなグローバルリーダーを育成する。

【青森山田高等学校　通信制課程】

教育目標

不登校・中途退学経験者への学び直しの機会の提供や、困難を抱える生徒の自立支援の多様な学びのニーズへの受け皿としての役割も果たしており、多様な学習スタイルを可能とする通信制教育が果たしている重要性を鑑み、学習ニーズに応じた指導方法等を確立し、通信制教育が持つ柔軟な学びの構築と質を最大限に生かしながら、創意工夫に満ちた取り組み方を進め、生徒一人一人に学ぶ意識を明確にして、誰もが「理解できる授業」を目指して、「生きる力」や「深い学び」を身に付けさせること。あるいは生徒たちが自立する力を身に付けさせ、これからの時代を乗り切ることができるように支援に取り組み、生徒のために本気で考える教職員の存在を教育目標とする。

【青森山田高等学校　自動車専攻科】

教育目標

・資格（国家二級整備士）取得を最大目標とした教育。

・自動車のコンピュータ化に対応できる人材、コミュニケーション能力に優れた人材の育成に努める。

・社会人として責任感と倫理観を持ち、自動車業界に貢献できる人材の育成に努める。

【青森山田中学校】
教育目標
・互いを尊重しあい、協働して社会を造りあげる品性のある人間形成を目指す。
・自らの力で未来を切り拓く、個性豊かなグローバルリーダーを育成する。

【呉竹幼稚園】
教育方針
・主体的な活動ができる子どもの育成。
・基本的な生活習慣の育成。
・多様な体験を通した豊かな感性の育成。

【螢ヶ丘幼稚園】
教育方針
・主体的な活動ができる子どもの育成。
・基本的な生活習慣の確立。
・多様な体験を通した豊かな感性の育成。

【北園幼稚園】
教育方針
・主体的な活動ができる子どもの育成。
・子どもの興味関心を大事にする。
・基本的な生活習慣の確立。
・多様な体験を通して豊かな感性を育てる。

【青森県ヘアアーチスト専門学校】
教育目標
・社会人としての教養や近代的な感覚を身に付けた人材を育成する。
・専門性を生かし、社会に貢献できる職業人を育成する。
・教職員の資質向上により、教育力を向上させる。

１－５　各学校の入学定員、学生・生徒・園児数（令和４年５月１日現在）

設置学校名		入学定員	収容定員	学生・生徒・園児数
青森大学	総合経営学部	110 名	440 名	461 名
	社会学部	70 名	280 名	289 名
	ソフトウェア情報学部	50 名	200 名	224 名
	薬学部	70 名	460 名	234 名
大学合計		300 名	1,380 名	1,208 名
青森山田高等学校全日制課程	普通科	320 名	960 名	884 名
	情報処理科	40 名	120 名	103 名
	自動車科	－名	80 名	32 名
	調理科	40 名	120 名	121 名
高校全日制合計		400 名	1,280 名	1,140 名
青森山田高等学校通信制課程	青森校	120 名	360 名	88 名
	札幌校	90 名	270 名	84 名
高校通信制合計		210 名	630 名	172 名
青森山田高等学校自動車専攻科		50 名	100 名	45 名
青森山田中学校		80 名	200 名	260 名
呉竹幼稚園		30 名	100 名	20 名
螢ヶ丘幼稚園		30 名	100 名	13 名
北園幼稚園		20 名	80 名	14 名
青森県ヘアアーチスト専門学校	昼間課程	60 名	120 名	82 名
	通信制課程	60 名	180 名	34 名
専門学校合計		120 名	300 名	116 名
総計		1,240 名	4,170 名	2,988 名

１－６　理事・監事、評議員、教職員の概要（令和４年 12 月９日現在）

1	理事長・理事 評議員	岡島　成行
2	理事 評議員	金井　一賴
3	理事 評議員	花田　惇
4	理事 評議員	成元　善一
5	理事 評議員	山田　真嗣
6	理事 評議員	大森　繁
7	理事 評議員	楠美　知剛
8	理事 評議員	木村　雅大
9	理事 評議員	澁谷　泰秀
10	理事 評議員	齋藤　孝次
11	理事 評議員	西　秀記
12	理事 評議員	溝江　光則
13	理事 評議員	宍戸　聡純
14	監事	林　均
15	監事	三浦　愼史

理事定数 10～17 名（現員 13 名）
監事定数２名（現員２名）
評議員定数 23～35 名（現員 29 名）

16	評議員	上原子　勲
17	評議員	藤　公晴
18	評議員	生田　勝幸
19	評議員	西村　政孝
20	評議員	中村　拓道
21	評議員	木村　郁子
22	評議員	相馬　季明
23	評議員	加川　史
24	評議員	一戸　善正
25	評議員	奥崎　誠一
26	評議員	笠原　史久
27	評議員	福士　大二
28	評議員	山本　浩平
29	評議員	工藤　義孝
30	評議員	沼田　智光
31	評議員	杉本　康雄

１－７　教職員の概要（令和４年５月１日現在）

機関名	区分	専任	非常勤
法人本部	職員	4 名	―
青森大学	教員	92 名	68 名
	職員	55 名	―
青森山田高等学校 全日制課程	教員	60 名	33 名
	職員	9 名	―
青森山田高等学校 通信制課程（青森校）	教員	5 名	5 名
	職員	―	―
青森山田高等学校 通信制課程（札幌校）	教員	4 名	5 名
	職員	―	―
青森山田高等学校 自動車専攻科	教員	5 名	―
	職員	1 名	―
青森山田中学校	教員	21 名	10 名
	職員	1 名	―
呉竹幼稚園	教員	6 名	1 名
	職員	1 名	―
螢ヶ丘幼稚園	教員	5 名	1 名
	職員	1 名	1 名
北園幼稚園	教員	3 名	2 名
	職員	1 名	―
青森県ヘアアーチスト専門学校	教員	9 名	9 名
	職員	1 名	―
合計		284 名	135 名

２．事業の概要

２－１　法人本部

＜事業計画＞

（１）法人全体の経営改善・財政基盤の安定化

（２）青森大学薬学部の定員充足率及び薬剤師国家試験合格率の向上

（３）青森山田高等学校等の学校施設の耐震化促進

（４）青森山田中学校の経営改善

（５）幼稚園に関する検討

（６）その他

・学園内機関を有機的に結び、スポーツ、芸術、勉学（学問）のバランスをとり、それぞれの道を究め、お互いに協力し、豊かな人間形成を育む。

・青森山田ブランドを生かす（活かす）経営を行う。

・学園の将来構想委員会を設置

・IT環境の向上による徹底した情報共有

＜実施結果＞

（１）法人全体の経営改善・財政基盤の安定化

・経常収支差額→-215,309千円

・奨学費→59,572千円の削減

→令和5年度黒字化

→奨学費においても継続的に削減

（高校無償化、高等教育の修学支援制度等を活用）

→補助金の獲得を一層強化

（２）青森大学薬学部の定員充足率及び薬剤師国家試験合格率の向上

・入学定員 70 名に対し令和 4 年度入学者数は 24 名（34.3%）と依然厳しい状況。

・令和 4 年度国家試験合格率は 60.87%（新卒）。（令和 3 年度 73.53%（同））

（３）青森山田高等学校等の学校施設の耐震化促進

・令和4年度着手した耐震工事は完了。

（４）青森山田中学校の経営改善

・令和 3 年度入学定員を 60 名→80 名に増員。令和 4 年度は入学者数 88 名となり入学定員充足率の適正化実現。

（５）幼稚園に関する検討

・呉竹幼稚園、螢ヶ丘幼稚園、北園幼稚園の三園について統廃合や認定こども園への移行について検討を重ねた。今後早い段階での方向性を打ち出す。

（６）その他

・学園内機関を有機的に結び、スポーツ、芸術、勉学（学問）のバランスをとり、それぞれの道を究め、お互いに協力し、豊かな人間形成を育む。
→高大連携授業（大学・高校）、ＳＤＧｓプログラム（大学・高校）、自然体験（大学・幼稚園）、サッカーやスキー等のスポーツ教室（大学・高校・幼稚園等）などの機関連携による取り組みを行った。
・青森山田ブランドを生かす（活かす）経営を行う。
→株式会社青森山田サービスが新事業として立ち上げた「スポーツアカデミー」と学園のスポーツ分野での連携を図り、低学年層への指導を行った。
・IT環境の向上による徹底した情報共有
→IT推進部を新たに設置し、ソフトウェア情報学部角田先生を中心に、学園内IT化に向けた調査を行った。
＜実行項目＞
① 給与明細電子化導入（学園）
② AI文字起こし導入（学園）
③ OneDriveによる会議資料電子化（学園）
④ 学習成果の可視化アプリ作成（大学）
⑤ 青大アプリ導入（大学）
⑥ 出席システムの対面・オンライン区別化（大学）
⑦ 新Web出願システム導入によるコストダウン（大学）
⑧ 大学備品管理電子化による業務効率化（大学）

＜今後の課題＞
（１）経営改善・財政基盤の安定化
・令和5年度においても引き続き経常収支差額の黒字を目指す。
・奨学費について、令和5年度も継続して高校無償化、高等教育の修学支援制度等を活用し、奨学費の削減を図る。
・補助金の獲得に向けた取り組みを一層強化する。
（２）青森大学薬学部の定員充足率及び薬剤師国家試験合格率の向上
・国家試験合格率が入学者数の増減に大きな影響を及ぼすと考える。定員充足率の向上と安定化、国家試験合格率を向上させるため、薬学教育センターを中心とした、より具体的で実効性のある取組を講じていく。
（３）青森大学の一部校舎等の耐震化
・耐震化計画の実行に向けて、協議を重ね、具現化につなげる。
（４）青森山田中学校の経営改善
・引き続き入学定員充足率の安定化を図る。
（５）幼稚園に関する検討
・呉竹幼稚園、螢ヶ丘幼稚園、北園幼稚園の三園について統廃合や認定こども

園への移行について検討を重ね、具体的なスケジュール等を打ち出していきたい。

（６）継続し学園各機関の連携を図ることを前提にする。また、IT 寛容については、今年度、大学において実施検証した事項を各機関に段階的に導入する計画で進める。

２－２　青森大学

＜事業計画＞

（１）大学全体

１）教育力の向上

青森、むつ、東京それぞれの特色を生かした３キャンパスの協働による教育の仕組みを構築する。DX 時代に対応し、IT を活用したデータ駆動型の教育方法と、薬学部を除く３学部で実施されている副専攻制度等を利用することで、学びの自由度を広げ、学生ファーストの仕組みを構築していく。

２）ＩＴ基盤整備

教育の質向上のために各キャンパスにオンライン授業のための設備整備（むつと東京については全教室整備希望）を行う。業務改善のために各会議室にオンライン設備の整備も行い、データ駆動型により、会議資料のペーパーレス化を会議全体で実施していく。

３）学部再編計画

総合経営学部と社会学部の統合について可否を決定していく。

４）フィールド・ツーリズムコース

関連科目が開講されるのは 2023 年度であり、2022 年度はその準備段階として、公開講座や特別講義（実技等）を実施。うち数回は東京キャンパスやむつキャンパスでの開講とし、関東を中心とした学生募集等に利用する。

５）薬学部の入学者増

進学先の選択理由の一つとしてあげられる国家試験合格率を前年度以上に向上させる。あわせて、進級率・卒業率についても前年度以上に向上させ、地域医療への貢献に立ち向かう人材を育成していく。

６）退学者防止対策の徹底

系列校である青森山田高校との高大連携による情報共有等を行う。

（２）総合経営学部

１）昨年に引き続き、FD の強化を行う。ベンチャー経営、中小企業経営で活躍できる人材を育成するための授業内容の改善と学生の修学の意欲

を高めるための工夫を各教員が随所で進める。

２）これまでの青森商業高校だけに留まらず、青森山田高校、五所川原商業高校などの高大連携を強化する。出前授業についても積極的に赴き、連携授業を進め総合経営学部入学へつなげる。

３）長期インターンシップ実施のための情報共有を進める。実施するための課題を洗い出し、具体的に実施するインターンシップ受け入れ先の確保やインターシップの内容の構築進める。実施へ向けた諸課題解決へ向けて取り組む。

４）フィールド・ツーリズムコースの展開へ向けて、関連授業を展開し、カリキュラムの構築と教員の確保を進める。

５）教員相互、学生相互、及び教員と学生の顔が見える関係性を深めるために、学年ごとの「ゼミ」の共通の方針を確認し進める。

６）離学者の減少に取り組み目標を１０名以内にする。

（３）社会学部

・学生募集

令和 4 年度は定員 70 名を確保し、さらには 90 名の入学を目標とする。

・カリキュラムの再編

社会学部教員の退職者に対して、補充は資格取得科目を担当する教員に限定し、コミュニティー創生コースの授業に対しては総合経営学部との合同開講、他学部履修を推進する。

・別地キャンパスとの連携

学生募集活動及び学生指導を 3 キャンパスで連動させ、効率的な教育及び学生募集体制を築く。

・青森山田高校との高大連携

令和 4 年度は青森山田高校普通科キャリアアップコースの生徒数が倍増することに対応するため、社会学部の教員 6 名で担当していく。

（４）ソフトウェア情報学部

1) 学生募集

・ 青森山田高校との連携強化。情報処理科 2・3 年生向けの特別授業(毎週実施)の継続。情報処理科の生徒募集活動支援(将来の入学者を増やす)。情報処理科以外との接点を増やす。

(達成目標) 青森山田高校からの入学者 20 名(2020 年度 16 名)

・ 実業系高校との高大連携活動の継続と拡充、オンライン講義等の活用により高大連携活動の効率化を図る。また高校生科学研究コンテストや各種セミナーなどの先端的な活動を通じて普通高校との接点を増やす。

(達成目標) 連携高校からの入学者 20 名(2020 年度 13 名)。

・ 入試改革への対応、各選抜での入学者数のバランスや指定校推薦枠の見

直しを行う。また入学前教育の内容を見直し、入学後の追跡調査、効果検証を行う。
(達成目標) 入試要項の改訂、入学前教育の実施と分析。

2) 学生教育

・ 成績上位者への個別対応を強化、高度な内容を選択できるようにする。
(達成目標) 創作ゼミナール、卒業研究の見直し

・ システムの活用による学生情報の可視化と共有、対応のマニュアル化を進める。
(達成目標) 学生情報のオンライン共有システム整備。

・ オンライン講義を拡充、また講義の録画・配信を進める。
(達成目標) 専門科目の講義の録画・配信の実施

・ 多キャンパスに対応できる柔軟なカリキュラム編成の検討を開始する。また研究室の複数担当制により、スタッフのキャンパス間での移動を可能にする。(達成目標) 複数担当制の導入

3) 就職支援

・ 学生が参加しやすい IT 系企業との連携による地域活動を学内に誘致、運営スタッフとして学生を参加させることで、早い段階からの就職意識向上、雰囲気作りに取り組むとともに、学生自身の社会性の向上を目指す。(達成目標) 学内での地域活動実施(5 回)

4) 研究

・ 学部としての研究活動の活性化、東京キャンパス／むつキャンパスをベースとする研究テーマの検討
(達成目標) 学内研究会の実施(6 回)

5) 学部運営

・ 学部の定員増への対応、多キャンパス化への対応として新規採用計画を進める。(達成目標) 新規採用 3 名

・ 東京キャンパスとの連携強化として、キャンパスの間の人事交流を進める。(達成目標) キャンパス間の交代制導入

（5）薬学部

1) 昨年度に引き続き、学生募集を最重要課題として取り組む。そのため に青森大学薬学部の魅力を可視化し、入試課と連携して高校に青森大学薬学部で学ぶことの魅力を積極的に伝える。学生募集は厳しい状況で、定員を減少することも検討していく。青森県内（東北県内）の薬学部志望者数の減少、学生数の減少から、学生募集も地域の範囲を広げる必要がある。留学生も増やす必要がある。一方で、県内の薬学部志望者数を増やす努力も必要である。

2) 薬学教育センターは学生が積極的に活用できる窓口になるように、従

来の担任制に加えて強化する。また、入学前教育、低学年からの学習の質向上、学生の対応窓口、補講管理を含めた学生教育を薬学教育センターに一元化し、学生委員会、担任と連携し、活動を活性化させる。薬学教育センター制度は大きく変革したが、機能面では課題も多いことから検討を加える。それぞれの業務を推進し、学生に対するさらなる認知も必要である。

3）薬学部のカリキュラムの内容、教える教員、学ぶ意義、必要性をわかりやすく解説するホームページを作成し、学内外を問わず薬学科目の魅力を可視化する。このコンテンツは学生募集にも役立てる。また、学生の成績、動向調査と、出身校、入試区分を分析し、高校への募集を戦略化する。HP 更新はアクセス数に大きく影響するので、さらに協力をお願いする。出前講義や出張体験セミナーなども薬学教科に対応して stock 化する。学生募集に結びつけるために、各教員が自覚し協力する。

4）学生教育については、従来、種々の方策を施行している一方、教える側の改善が望まれる。FD・SD 委員会を強化し、教員側の薬学教育における意識改革を行う。また、教務委員会での分科会を有効活用し、科目間の連携や新カリキュラムの構築を行う。また、次世代を担う人材を育成する意欲と態度を身につけるため、SA・TA を活用して、研究を通して将来教育ができる学生の人材を育成する。薬学教育センターの活動強化を含め、これらの教育に対する改善に取り組み、新卒薬剤師国家試験合格率は 80%以上（新卒）を目標とするとともに、薬剤師国家試験合格者数 40 人以上を目指す。

5）薬学部は、カリキュラム構成が複雑で、教務関係の委員会が多く、さらにイベントや対外的業務の多様化により、それに携わる公務が多い。また、専門性や特殊性が高いこともあり、誰もが同じように容易に引き継げなく、一部の教員の負担が増加する傾向にある。可能なかぎり組織の合理化を試み、業務の効率化を図る。また、教員には、教育、学部運営を第一義とすべきであるが、薬学研究も併行して行うことが教育研究機関としての責務でもあり、研究マインドのさらなる醸成も本学部の責務でもある。そのための研究施設の充実が必要である。教育を充実されるための教員数増も必要であるが、研究設備環境の充実が教員募集において勤務動機の一助となるだろう。また、研究室の合理化を推進し、研究環境を効率的に充実させ、定期的に共通機器を整備できる計画を推進する。現在、LC/MS/MS 質量分析装置とフィジカルアセスメントモデル「フィジコ」の導入を申請中である。研究室の配置、あり方については、長期的な再編成を含めて効率的な組換えを行いたい。

（６）東京キャンパス

・留学生 30 名程度、社会人 5 人程度の獲得および首都圏在住の日本人学生 10 人程度を確保する。定員増に対応して日本人学生・社会人学生の募集を強化する。
・東京キャンパス一期生が 4 年生に進級するため、キャリア指導を強化し、就職率 100%を目指す。
・各教室の改修を進め、学生が快適に利用できる空間づくりを行う。
・遠隔授業の環境を見直し、必要な機材を導入し、今後の授業における活用方法について検討する。

（7）むつキャンパス

①学生が不利益を被らないような別置キャンパスの運営体制（カリキュラム体系、学生サービス、その他）を構築すること

②下北地区大学等進学率の向上及びむつキャンパス学生 20 名の確保

③ステークホルダーとの関係性を構築すること

＜実施結果＞

（1）大学全体

1）教育力の向上

学長のリーダーシップのもと、３キャンパスカリキュラム編成準備委員会が主導となって、IT 等を活用した文理融合型の教育や副専攻制度、長期インターンシップ等を展開し、青森、むつ、東京それぞれの特色を生かした３キャンパスの協働による教育の仕組みを構築した。学生に寄り添った、学びの自由度を広げ、学生ファーストの仕組みを構築することができた。

2）ＩＴ基盤整備

学生満足度調査や教職員の授業改善方策等をもとに、さらなる教育の質向上のために、青森大学遠隔授業の運用に関する規程など関連規程の見直し、各キャンパスにオンライン授業のための設備整備を行い、東京、むつについては国や自治体等の協力を得ながら、全教室において整備を行うことができた。また、教職員の業務改善のため、各会議室にオンライン設備の整備も行った。これらの整備と教職員の意識啓蒙等により、会議資料のペーパーレス化を会議全体で実現でき、業務改善にもつながった。

3）学部再編計画

総合経営学部と社会学部の統合について、方向性については教職員内で確認できたが、具体的な計画等については議論を深めているところである。

4）フィールド・ツーリズムコース

2023 年度の関連科目の開講に向け、今年度はその準備段階として、関連する公開講座や特別講義を実施した。東京キャンパスやむつキャンパスでの開講については今後実現する方向で検討していく。

５）薬学部の入学者増

国家試験合格率については、昨年度の合格率を超えることはできず、60.9%となった。また、標準就業年限内卒業率については、昨年度を超え 44.0%となった。地域医療への貢献に立ち向かう人材を育成していくべく、引き続き取り組みを強化していきたい。

６）退学者防止対策の徹底

系列校である青森山田高校との高大連携による授業の推進、本学に入学する青森山田高校全生徒の配慮情報の共有などを行うことができ、退学者防止対策の一助となった。

７）大学機関別認証評価の準備として令和 3 年度の自己点検評価報告　書を策定し、令和 4 年度時点での各基準項目及び評価の視点に関する現状の要約となる自己点検評価シートを策定した。また、令和 4 年度ベースの自己点検評価書を策定し、審査対象年となる令和 5 年度に向けて課題及び対策等を検討した。

（２）総合経営学部

１）目指す人材を育成するための授業展開は、教員によることが大きいことはこれまでと変わらないが、コースのあり方を検討して今後の授業の改善と学生の学びの意識・意欲を高めるため対策を検討した。ゼミの活動も活発の取り組み、青森市学生ビジネスコンテストで青森山田学園が所有し遊休状態になっている「八甲田新湯」の再生に取り組み、観光ビジネスに活かすアイディア発表しグランプリを受賞した。また、地域の酒類販売店と連携し、学生が田上、稲刈り、仕込み、ラベル制作を行い日本酒の純米吟醸「青森大学」を完成させた。ベンチャー経営、中小企業経営で活躍できる人材を育成するための授業展開が行われた。

２）青森商業高校との高大連携については、会計簿記の商業系の連携授業を行い、実際に総合経営学部へ入学する学生の確保にもつながった。昨年課題にあげた青森山田高校との連携授業を実施できた。出前授業にも積極的に赴くことができた。県外の岩手県水沢商業高校にも赴き連携授業を行なった。

３）長期インターンシップ実施につながる、インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲについては、十分に学生に周知されず実施ができなかった。

４）令和 4 年度からの新設される「フィールド・ツーリズムコース」の展開については、カリキュラムの構築と担当教員の確保を進めたが、担当教員の確保が十分に進めることができなかった。

５）昨年に続き、教員相互、学生相互、及び教員と学生の顔が見える関係性を深めるために、ゼミ担当教員の面談を推進させた。退学者の前年比減少にある程度の成果をあげている。１年ゼミ担当教員の会議を行い、入学前教育について検討し、入学前教育の教材を初年度教育に生かすことを共通の方針として確認し進めることができた。

６）離学者（退学及び除籍者の合算）は２３名で、体系的な離学者防止策が必要と考えられる。

（３）社会学部

・社会学部の入学者定員確保

社会学部と青森山田高校キャリアアップコースとの連携が 4 年目を迎え、青森山田高校の生徒に社会学部の教育内容が浸透してきたことに加え、同校の他のコースからも入学者が増加した。また東京キャンパスとむつキャンパスの学生募集に関わる協力も相まって、入学生数は 71 名となり、定員が確保された。

・教員減少に伴うカリキュラムの再編

退職と配置転換により社会学部の教員が 3 名減少した。これに対し、他の教員のコマ数増と 2 学部合同開講科目を増やしたことにより、3 名の教員減に対応できた。

・青森山田高校との高大連携と入学前教育

高大連携の一環として、社会学部への入学者が最も多い青森山田高校の指定校推薦合格者に対し、社会学部の教員及び卒業生が高校へ訪問し、入学前教育を実施した。これにより入学前に大学教員と生徒の信頼関係が一層深まった。この取り組みは離学者対策としても有効と捉え、他の高校に対しても実行可能かを検討している。

（４）ソフトウェア情報学部

1) 学生募集

・ 高大連携活動については従来の活動を継続した。
  - 青森山田高校情報処理科向け特別授業の実施(2 年生 22 回、3 年生 21 回)
  - 青森山田高校普通科向け特別授業の実施(2,3 年生 1 回ずつ)
  - 青森商業高校課題研究指導(オンライン)
  - 高校生参加イベントの実施(高校生科学研究コンテスト、オープンデータデイ)
  - 高校での特別授業実施(弘前南高校、弘前実業高校)
・ むつキャンパス開設に合わせて、むつ地域での高大連携活動を開始した。
  - 田名部高校総合学習の研究発表会に参加、発表動画を用いて教職員によるレビューの実施

- 大湊高校生向けにソフトウェア情報学部との交流会実施

・ 入試分析、入学前教育

- 定員 70 に対して 65 名の入学者を確保した。
- 青森山田高校から 13 名(目標 20 名)と目標を下回っている。普通科の生徒が半数を占める一方、情報処理科の生徒が他学部希望に流れる傾向があり、特別授業の内容が受け入れられていない(難しすぎる)可能性がある。
- 連携高校から 12 名(目標 20 名)と目標を下回っている。高大連携を入学に結びつける仕組みが不足している可能性がある。むつ地域での連携は低学年から始まっており、来年度以降に効果が期待できる。
- 入学前教育をオンラインで実施、YouTube から録画配信も行った。

2) 学生教育

・ 学習アドバイザ内で毎週の学生の出席状況を共有し、出席率が低下した場合に警告・面談・保護者連絡などの対応を確実に実施、指導情報を共有する仕組みを運用している。

・ 専門科目を対象に、前期 20 科目(基礎 STD 科目 2 科目含む)、後期 21 科目(基礎 STD 科目 1 科目含む)で講義の録画と配信(YouTube)を実施した。

・ 研究室の複数担当制については 2023 年度実施として準備を進めた。

3) 就職支援

・ 青森県との共同で地域の企業を学内に招いて授業の中で業界研究会を開催した。

・ 野辺地町教育委員会との連携事業として ICT 支援員の派遣を実施、4 年制 8 名が通年で野辺地町の小中学校に勤務した。

・ 就職担当スタッフによる活動状況のチェックや個別面談を実施した。

4) 研究

・ 学外からの招待による研究会を実施した(2 回)。

5) 学部運営

・ 教員の公募・採用を実施、2 名を新規採用した。

・ 3 キャンパスでの連携を強化するため、スタッフがキャンパス間を定期的に移動できるようにカリキュラム・時間割を調整、順次運用を開始している。

・ 学生・スタッフの交流を促進する取り組みとして新入生オリエンテーションを東京キャンパスで実施した。

（5）薬学部

1）学生募集を最重要課題とし、青森大学薬学部で学ぶことの魅力を積

極的に伝えるために、受験生を対象とした薬学部専用リーフレットの作成、薬学部特別奨学制度に加え、新たに薬学部在学生支援制度導入による特待制度のアピール等を行なった結果、昨年度の 28 名から 42 名(編入生を含む)と入学者数が大幅に増加し、定員を 70 名から 50 名へと減少したこともあり、１年生定員充足率は昨年の 0.34 から 0.78 と大幅に改善した。一方、積極的に韓国の高校と提携を行い、留学生の増加に努めたが、留学生確保には至らなかった。

2）薬学教育センター専任職員を配置した結果、センター業務を円滑に行うことができるようになった。センターの活動を学生に周知するための薬学教育センターニュースの発行、模試後の面談による個別学習指導、国家試験前の 6 年生に対するメンタルケアをするための薬学教育センターサロンの開設など、新しい試みを行なった。また、整備された教育センターのスペースは、学生にも有効に活用されたことから、一定の効果があったと評価する。

3）イベントについては、薬学部の魅力を伝えるための新たなコンテンツを取り入れ、8 月でのオープンキャンパスでは 40 名近い参加があり盛況であった。また、薬剤師体験セミナーは定員を倍増し、薬剤師の魅力をより多くの生徒に伝えるために広報活動に努めた。

4）新卒薬剤師国家試験合格率（新卒）は昨年度の 73.5%から 60.9%に減少し、薬剤師国家試験合格者数（総数）も 35 人から 26 人に減少した。また、標準修業年限内卒業率は昨年度の 50.0%から 44.0%に減少した。今回の結果を受けて、教務委員会や薬学教育センターにおいて結果の解析と来年度に向けての改善策を検討している。

5）高額共通機器として、LC/MS/MS 質量分析装置とフィジカルアセスメントモデル「フィジコ」が導入され、研究教育環境を飛躍的に充実させた。今後の研究成果を期待したい。また、フィジコ導入は、4 年生の臨床教育の充実に大きく貢献することから、OSCE 対策も含め教育成果が顕在化するものと期待している。

（６）東京キャンパス

１）東京キャンパスにおける 2023 年 4 月の新入生数は以下の通り。

①特定地域内学部留学生

総合経営学部 18 名

社会学部 8 名

ソフトウェア情報学部 7 名

合計 33 名(前年度 30 名)

②特定地域内学部社会人学生

総合経営学部 1 名

合計１名(前年度０名)

③日本人学生

総合経営学部１名

社会学部２名

合計３名(前年度０名)

２）2023 年 3 月 31 日現在において、延べ 24 名(前年度 5 名)について年度中にインターン実習を行った。

３）就職活動については、ゼミ担任及び国際交流センター職員を中心に指導を行い、内定につながった。

４）各教室の改修は、フロアマットの張替えが必要となった場所について、東京キャンパスの職員がこれを行った。また、机・椅子等についても、新たな機材を導入した。

５）施設について、各教室のドア・廊下側壁、国際交流センターの壁紙・ドア、玄関の自動ドアの改修を行なった。

（７）むつキャンパス

①学生が不利益を被らないような別置キャンパスの運営体制（カリキュラム体系、学生サービス、その他）を構築すること

・3 キャンパス事務局長会議、3 キャンパスカリキュラム編成準備委員会、質保証委員会、事務局課長会議等に参加し、キャンパスの現状を共有し、各キャンパスでの課題等の洗い出しや検討を行い、運営方策の調整等を行った。

・青森本校とも連携を図りながら、遜色ない学生サポートに努め、クラブ活動の立ち上げ（フェンシング部、陸上競技部等）も進めた。

・地元出身が集まっており、視野が狭くなることが懸念されるため、青森本校や東京キャンパスとの学生間交流も積極的に進めた。

②下北地区大学等進学率の向上及びむつキャンパス学生 20 名の確保

・高校訪問（校長、進路指導部、3 学年主任・担任）やオープンキャンパス 5 回、高大連携事業、大学見学会（中高生対象）、進学相談会、個別相談会、自治体の広報誌、SNS での発信等、あらゆる手段を講じて学生募集活動に努めた。

・下北地区 4 校の大学等進学者は、R2 年 3 月卒 37.2%、R3 年度 3 月 37.9%、R4 年 3 月卒 47.9%と約 10%上昇した。本学への入学者増が要因の一つとして考えられる。

・下北地区 4 校からの本学への入学者は、R2 年 3 月卒 3 名、R3 年　3 月卒 4 名、R4 年 3 月卒 16 名（うち 1 名は青森本校スポーツ生）、R5 年 3 月卒 18 名（うち 2 名は薬学部、うち 4 名は青森本校一般生）とむつキャンパス設立前と比べると、約 4 倍以上の入学者を確保できて

いる。

③ステークホルダーとの関係性を構築すること

・青森大学の建学の精神・基本理念の下、むつ市をはじめとする下北地区の自治体、むつ商工会議所、むつ青年会議所、むつ市観光協会や各企業・法人等との連携・協力体制を整備し、様々な地域活動に取り組んだ。

＜今後の課題及び対策等＞

（1）大学全体

1）大学機関別認証評価への対応

令和 5 年度は、令和 6 年度に受審する大学機関別認証評価の対象年度である。認証評価受審対策本部、自己点検評価・認証評価対策委員会、質保証委員会等の協働でこれまで毎年策定してきた自己点検評価報告書を基に、日本高等教育評価機構の受審前年度講習等に沿って自己点検評価書の策定を進める（提出は令和 6 年 6 月の予定）。更に、令和 4 年度の自己点検評価報告書を早急に策定し、速やかに令和 6 年度の自己点検評価報告書の策定に取り掛かり、次年度の受審において確実に「適合」となるよう準備を進める。

2）教育力の向上

今後は、国の補助金なども活用しながら、IT を活用した文理融合型の教育の展開を推進していく。FD・SD を活用し、授業方法の改善を継続的に行っていく。特に、遠隔授業の方法については十分な検討・改善策を実施する。また、副専攻制度、長期インターンシップ制度を積極的に活用するよう学生へ働きかけを行い、青森、むつ、東京の地域資源を最大限活用した学生が輝く大学となるために、学長のリーダーシップのもと、学生に寄り添いながら、教育力のさらなる向上につなげていきたい。令和 4 年度に実施できなかった 3 各学部のカリキュラムの改正を 3 キャンパスカリキュラム編成準備委員会及び教務委員会において検討・推進する。

3）ＩＴ基盤整備

IT 基盤の設備整備については、初期段階の整備ができた。今後は、更なる整備を実施すると共にこれらの設備をフル活用し、教育の質向上、教職員のさらなる業務改善につなげていきたい。

4）学部再編計画

総合経営学部と社会学部の統合や今後の学部再編については、学園の方針等に則り、教職員と情報を共有しながら議論を深め、両学部の学生募集状況にも対応しつつ、具体的な計画等の検討を行っていきたい。

５）フィールド・ツーリズムコース

来年度の関連科目の開講に向け、東京キャンパスやむつキャンパスでの実装も含め、体制を強化し、学生の積極的なコース選択とともに、内容のさらなる充実を図り、今後の学生募集の目玉として展開していきたい。

６）薬学部の入学者増

地域医療への貢献に立ち向かう人材を育成することを主眼とし、国家試験合格率及び標準就業年限内卒業率などの向上対策を実施する。また、留年者の格段の減少を図る対策を実施する。更に、積極的な学生募集を行いつつ、教育と研究の充実を図り、入学者増と収容定員充足率の向上につなげたい。

７）離学者（退学者及び除籍者）防止対策の徹底

離学者対策の新たな部局を設置し、入学者へのこまめな声掛けや面談等を行い、学生をほっとかない、見捨てない、学生に寄り添った対応を行い、逐次各学部の状況を確認しながら、学長のリーダーシップのもと、教職員一丸となり、離学者（退学者及び除籍者）の格段の減少に努める。

８）全学、各学部、各キャンパスの事業計画の実施を管理し、修正等を含め、大学全体として必要な事項が実際されていることを管理していく。

（２）総合経営学部

１）目指す人材を育成するための授業展開は特に専門課程へ向けてコースのあり方をさらに検討、改善する必要がある。各４つのコース教員をコース担当制にし、科目・授業の展開のさらなる工夫改善しコースごとの特徴を明確にする必要である。そのためには、専門教員を計画的に採用する必要がある。学生にも引き続き、自身のコースを意識させ学生の学びの意識・意欲を高めるために対応することが課題である。

２）昨年に引き続き３キャンパス制を充実させるために、教職員の課題の共有を行い、教員の配置（新規採用教員、非常勤教員の確保）やカリキュラムの実施に向けて創意工夫し対応することが大きな課題である。

３）長期インターンシップの実施へ向けて、インターンシップの受け入れ先との調整、インターンシップ実施中の他の科目との調整など、実施に当たってさらに詳細の確認と調整が課題である。

（３）社会学部

・離学者の減少

離学者の増加は初年度教育における学生へのケアが不十分であることが原因と考え、令和５年度から１年ゼミの教育内容を大幅に変更した。今後、2 年生以上のゼミについても同様な改革を実施する予定である。

・入学者数増加への対策

青森県の少子化が進み、県内における学生募集がより困難な状況になりつつある。今後、留学生や東京キャンパスへの日本人入学者、社会人入学、短大からの編入学など、多様な募集活動に力を入れる必要がある。

・教育・研究の促進

特待に頼らず県内外から学生を募集するためには、ユニークな教育や研究を一層推進し、持続的に社会へアピールをしていく必要がある。

（4）ソフトウェア情報学部

・ 学生の学力向上
  - ➢ 入学者の学力が向上していることに合わせて、優秀な学生が退屈しない教育内容を用意する。
  - ➢ オンラインの教育サービスやコンテンツの活用を進め、国内・国際標準レベルの学習内容を意識した授業を行う。

・ 定員増への対応
  - ➢ スタッフおよびファシリティの増強を行う。
  - ➢ 広報体制を強化する。新しいスタッフを中心に「最先端の ICT」との接点をイメージさせ、専門学校等のと差別化をはかる。
  - ➢ 東京キャンパス/むつキャンパスでの高大連携・社会連携の取り組みを強化する。
  - ➢ 先進的な教育システムとともに、多キャンパス体制を重要なアピールポイントとして打ち出す。

・ 離学者対策
  - ➢ 学習アドバイザを中心に、学生一人ひとりの状況把握を確実に行うためのシステムを確立する。
  - ➢ 特に 1 年生の授業を中心に、学生間の交流を促進するためのアイスブレークなどの活動を積極的に取り入れる。

・ 3 キャンパスへの対応
  - ➢ 引き続き教員の交代制を運用するとともに、教員・学生のキャンパス間での交流を促進するためのイベント等を積極的に実施する。

（5）薬学部

1）引き続き学生募集を重要課題として定員充足を目指す。薬学部の志願者数はここ数年伸び悩んでいたが、今年度から、定員を 70 名から 50 名に見直し、積極的な募集活動を行なった結果、入学者数、定員充足率に大幅な改善が見られた。さらに定員充足させるには、年内入試である学校推薦型選抜による入学者数を増加させる必要がある。余剰薬剤師時代の到来を告げる報道もなされているが、北東北、特に青森県における薬剤師確保は喫緊の課題である。全国一の薬剤師不足は深刻な状況を呈しており、薬剤師偏在解消には程遠い状況にあることから、薬学部

や薬剤師の魅力を今まで以上に広めるとともに、見直した学費や、令和4 年度から開始した薬学部在学生支援制度をはじめとする本学独自の薬学特待制度などの奨学制度の魅力をアピールし、入学者増に努めたい。

2）令和 6 年度改訂予定の薬学教育モデル・コア・カリキュラムに対応した新規カリキュラムを構築する上で、大学をアピールできるような従来までの地域に根差した科目はそのままに、各専門科目の充実に加え、青森大学薬学部独自の新規科目を構築する。

3）青森大学薬学部は、少人数教育と修学に対する学生のフォローに関しては、他大学よりも優っていると自負すべきものであり、薬剤師を志す学生を手厚く支援できる学部を目指す。学生の教育レベルを維持し、さらに向上させるため、薬学教育センターの活動を強化する。また、教育の質を向上させるため、薬学部内での FD・SD の活動を行う。そのことが、よりよい教育システムの構築に繋がり、学生募集のアピールにもなる。そのためには教員に対しても教育や研究にやる気がでるような環境作りが必要である。

（6）東京キャンパス

1）留学生については前年度を上回る人数を確保し、目標を達成した。今後も引き続き日本語学校を始めとするネットワークと情報交換を活発にし、この状況を維持していく。社会人については 1 名を確保したが、さらに江戸川区内をはじめ、地域の企業・団体に働きかけを行う。日本人学生については専任職員による高校訪問を中心に、首都圏近郊の高校への働きかけを強化する。その他、オープンキャンパスの実施や広告媒体への活用、セミナー、勉強会などの実施を通じて東京キャンパスの認知度の向上を目指す。

2）キャンパスの学習環境をはじめ、学生生活全般について検証を行い、大学としてのサービス・機能向上をはかる。また IT インフラの整備により、教育・研究環境のさらなる充実を目指す。

3）インターンシップの強化など、4 年生の卒業、就職・進学（他大学大学院）指導に注力する。

（7）むつキャンパス

①学生が不利益を被らないような別置キャンパスの運営体制（カリキュラム体系、学生サービス、その他）を構築すること

・選択科目等を増やし、選択肢の幅を広げる。

・課外活動（クラブ・サークル）の充実。

・教室確保や学生の居場所づくり

・学生対応が疎かにならぬように、教職員体制の構築。

②下北地区大学等進学率の向上及びむつキャンパス学生 20 名の確保

・下北地区 4 校の定員割れ、2027 年度に大湊高校、むつ工業が統合と少子化が進んでおり、中学生をはじめ、早期に大学進学を意識付けさせることが重要である。

・自治体や地域と連携し、地域経済の活性化。若者人口増。

・下北地区外からの受入れ体制整備。むつキャンパス独自の魅力構築。

・高等教育の修学支援新制度の周知。

・就職先の確保、インターンシップの充実。

③ステークホルダーとの関係性を構築すること

・むつ市のみならず、隣接町村と連携推進。

・一定の企業や団体だけではなく、幅広く連携を進める必要がある。

・学生や教職員の負担を考えての実施。

２－３　青森山田高等学校　全日制課程

＜事業計画＞

（１）高校全体

・入学者目標数は 350 名～400 名 11 クラス

・出口の保障

・奨学費の削減

（２）普通科

・特進コース進学実績向上と募集活動

・キャリアアップコースと青森大学との連携授業

・スポーツコースアドバンスクラスの充実

（３）情報処理科（名称変更で現在の１、2 年生は IT ビジネス科）

・青森大学ソフトウェア情報学部との連携授業継続

（４）自動車科

・令和 4 年度から募集停止（最後の卒業生）

・自動車専攻科への進学

（５）調理科

・調理師養成施設として食のスペシャリストを育成

＜実施結果＞

（１）高校全体

・推薦入試で 323 名、一般入試で 42 名、留学生 1 名の計 366 名 11 クラスの入学者であった。400 名の定員に対し充足率は 91.5%とな

った。ちなみにこの 366 名という入学者数は、他の東青地区私立高校 3 校の入学者数を合わせた数の 360 名を上回る数である。
この結果は県内 40 校の中学校への訪問説明会、各部活動顧問監督の熱心な勧誘をはじめ、特進の勉強会などそれぞれの教職員の根気強い募集活動の結果といえる。

・進学実績としては、自治医科大学医学部医学科・東北医科薬科大学医学部医学科をはじめとする 4 年制大学に 259 名が合格した。国公立大学は埼玉大学の他に、茨城大・岩手大・弘前大など 9 大学 12 名、私立大学は早稲田大学・MARCH・同志社大・津田塾大など 97 大学 247 名が合格した。
　また、学園系列の青森大学へは 63 名が進学した。その他自動車専攻科へは 13 名、ヘアアーチスト専門学校へは 2 名の進学となった。

・奨学費の削減については以前 107 名であった S 特待を 73 名と削減を継続している。

（2）普通科

・特進コースは自治医科大学医学部医学科・東北医科薬科大学医学部医学科をはじめ埼玉大学や茨城大学の他、県内の国立弘前大学には 3 名合格した。
　また、青森大学 SDGs 研究所との連携により、さらなる探究的な学習に結び付けようと計画している。募集に関しては中高一貫教育をふまえ、小学生と中学生の勉強会や説明会を並行して行った。

・キャリアアップコースは 4 年目となり、青森大学の協力を得て連携授業を継続して行い、校内外での活動をより充実させた。スポーツアドバンスクラスは 1 年次 2 クラスを 1 クラスに選抜し、学力の向上を図った。

（3）情報処理科

・青森大学ソフトウェア情報学部との連携授業が 7 年目となり、青森大学への進学に結び付けた。科名を令和 4 年度から IT ビジネス科と改名した。

（4）自動車科

・学園系列の自動車専攻科へ 11 名が進学した。

・令和 4 年度より募集停止。

（5）調理科

・プロの講師による指導で、卒業と同時に国家資格調理師免許を取得できるために、即戦力としての期待がある。また、令和 4 年度より青森県ふぐ処理者認定試験の講習を行い資格取得に向けている。

高校生県内初合格者１名

＜今後の課題＞

（１）高校全体

・青森県東青地区の中学生が減少を続ける中、一般入試で多くの生徒を獲得することは困難と思われる。推薦入試の早い段階でより多くの入学者を獲得する必要がある。

・コースの再編も考慮しながら適切なクラス数の設定と適正な教員配置を計画していかなくてはならない。

・コロナの影響で教員の各種研修が中止になった。オンラインでの研修などの機会をとらえ、新学習指導要領に対応すべく教員の資質向上を図る。

・奨学費削減に関しては、引き続き強化指定種目を決定し人数を制限して削減を目指していく。

・ICT 環境の整備としてタブレット端末の配備など県立高校に劣らない教育環境を目指す。

（２）普通科

・特進コースは医歯薬をはじめ、難関大学進学に向けて学力向上を図るとともに、多様な入試方法に向けて長期計画で対策を講じる。また、民間学習塾（予備校）と連携し生徒へのサポート方法を考えて進学実績向上につなげていく。

・科コース全体の進学実績に向けて授業充実を図る。

（３）情報処理科・IT ビジネス科

・青森大学ソフトウェア情報学部との連携をさらに進め、青森大学進学につなげるため、コンピュータ室に設置してある機器を時代に即したものにバージョンアップさせる必要がある。

（４）自動車科

・在籍している生徒の進路先として自動車専攻科・青森大学を推奨する。

（５）調理科

・引き続き調理師養成施設として食のスペシャリストを育成していくとともに、実習指導者の不足など定員を超過したことによるデメリットを考慮し、定員内の入学者数としていく。

２－４　青森山田高等学校　通信制課程

＜事業計画＞

・青森校・札幌校

生徒募集―中学校への個別訪問と学校説明会への参加

高等学校の進路変更者と中途退学者の柔軟な受け入れ

進路指導―青森大学を含む学園関連教育機関への進学者を増やす

社会へ自立できる進路指導

＜実施結果＞

・青森校　新入生 12 名、転・編入生 47 名、青森大学へ進学１名

・札幌校　新入生 23 名、転・編入生　9 名、青森大学へ進学１名

＜今後の課題＞

・青森校・札幌校

① 学園高等教育機関への進路指導の強化と安定した入学者数の確保

② 様々な支援制度の活用、ハローワークの研修などの活用と教員研修会への積極的な参加

③ 青森大学キャンパス施設・設備を活用した利便性のある授業展開

④ 東京校開校に伴う 3 校の密な連携

２－５　青森山田高等学校　自動車専攻科

＜事業計画＞

1　生徒募集についての取り組み。志願者・入学者数を増加させる

・市内各高校への募集活動の積極的な働きかけ

・オープンキャンパスの充実

・企業奨学金の紹介、修学支援金制度の説明

・女子生徒の勧誘

2　自動車のコンピュータ化に伴う、新構築の外部技術講習会の実施

・各ディラーによる最新の技術講習会等の実施

・教員の資質向上のための外部講習会等への積極的な参加

＜実施結果＞

1　生徒募集についての取り組み。志願者・入学者数を増加させる

・コロナ禍ではあったが、昨年度なみに市内各校への訪問説明ができた

訪問校（青森山田高、青森工業高、青森商業高、青森北高、北斗高）

・オープンキャンパスは予定通り 2 回実施し、計 40 名の参加者があった

・修学支援金制度の理解が広がり、募集にとっては良い方向に向かった

・女子の入学生が今年度も１名入学した

２　自動車のコンピュータ化に伴う、新構築の外部技術講習会の実施

・令和４年度は11のディラーの技術講習会を実施

（ヤナセ、コマツ、三菱、日野、ダイハツ、マツダアンフィニ、日産プリンス、スズキ自販、ホンダ、スバル、日野）

・工場見学を４か所実施（ネッツトヨタ、トヨタカローラ、日野自動車、いすゞ自動車）

＜今後の課題＞

・入学者数は女子１名を含め目標であった25名を下回り14名となった。その内訳は青森山田高校自動車科 12 名、普通科キャリアアップコース １名、青森商業高校１名である。依然として青森山田高校からの入学生が多くを占めている。令和４年度から、青森山田高校自動車科が募集停止となり、現状のままでは２年後は入学者数が激減する恐れがある。しかしながら自動車整備士養成は、地域社会や企業のニーズにこたえるためにも必要であり、自動車専攻科存続のためには、新たな募集戦略（青森山田高校普通科キャリアアップコースからの入学者を増やす等）あるいは、専門学校への移行を具体的に進めるなどの必要がある。学習環境や施設･設備はここ数年でかなり改善、整備されており、せっかくのこの施設を活かし、生徒に提供するためにも、今年度中には方針を明らかにし、実行に移す必要がある。

２－６　青森山田中学校

＜事業計画＞

（１）志願者数・入学者の計画

・目標志願者数160名

・目標入学者数80名

（１）魅力ある学校づくり

・授業の充実（教員研修会参加、中教研参加等）

・いじめ対策と不登校支援（専門家を活用した教育相談体制の整備）

・大学入試を見据えた効率的カリキュラムの実施

（３）健康維持・健康づくりの推進

・効果的な食事の摂取方法や免疫力の向上

・感染症に関する正しい知識と講習会の実施

＜実施結果＞

（１）志願者数・入学者の計画

・令和５年度入学 志願者 87 名

・入学者は 74 名

・令和５年度入学者向け学校説明会

【青森山田中学校体育館：2022.11.23(土) 実施】

参加者：100 家庭・222 名

（２）魅力ある学校づくり

・Chromebook を活用した、ICT 教育を充実させた

・外部講師による特別授業「生涯設計のススメ」を実施した

・青森市理科研究発表大会において「最優秀学校賞」を受賞した

（３）健康維持・健康づくりの推進

・校外学習として「八甲田山帰化植物駆除」を実施した

・特別授業として「うなぎ・牛肉」食材による食育実習を実施した

＜今後の課題＞

・特進コースの勉強会、各部活動の練習会、学校説明において本校の魅力を伝える。

・令和６年度入学は受検を２回実施し、確実に８０名以上の入学者を確保する。そして、安定的に８０名を高校に進学させる。

・Chromebook 及びスタディサプリを活用した ICT 教育をさらに充実させる

２－７　呉竹幼稚園

＜事業計画＞

地域の自然や社会環境、青森山田学園ならではの良さを活かした体験活動を通して、これからの時代に求められる想像力や豊かな人間性などの「生きる力の基礎」を育む。

＜実施結果＞

（１）地域の自然と青森山田学園の人材を融合･活用した体験活動の充実により、子どもたちの興味･関心･意欲を喚起し、主体的な活動へつなげることができた。

①年長「森の冒険」指導者：青森大学　佐々木豊志教授他

・青森大学中庭…未知の場所での積極的に冒険をしたり、見ず知らずの大学職員や学生に進んで話しかけたりした。

・夏の沢山学校林…雨の中の森で、カッパと長靴で思う存分自然にふれ楽しんだ。

・秋の沢山学校林…薪割りやマッチで着火することに自分から挑戦し、焚き火体験を楽しんだ。

・冬のモヤヒルズ…イグルーの中をろうそくの灯りを頼りに探検したり、作り方を体験したりして楽しんだ。青森大学ヒュッテ２階で昼食をとり、初めての場所に喜んでいた。

（２）青森山田学園の人材・施設を活かした活動により、スポーツの楽しさを味わったり、異文化に興味をもったりすることができた。

①年長・年中「サッカー教室」指導者：青森山田高校サッカー部コーチ

・青森山田高校サッカー場で呉竹幼稚園園児のみのサッカー教室を５回実施することができた。広いグラウンドでのびのびと走り回り、楽しみながら技術が向上した。

②年長・年中「スキー教室」指導者：全日本スキー連盟公認指導員
青森大学　田澤潤一キャリア支援課課長

・有資格者による丁寧で適切な指導により、２日目からリフトを使用して斜面を滑り降りることができた。また、初めてスキーを体験した年中の園児が家族とモヤヒルズに通うなど、親を巻き込みスキーを楽しむことにつながった。

③全クラス「国際交流」

・青森大学留学生との交流（５回、５カ国、９名と交流）により、国旗を調べたり国旗のカードゲームをしたり、地図や地球儀に興味をもつようになった。また、日本の事を留学生に伝えようと友達と工夫して取り組むことができた。

（３）地域環境を活かすことにより、幼稚園ではできない活動を補ったり、社会性を身に付けさせたりすることができた。

①年長「野菜作り」指導者：青森市油川むつみ窯　三浦幸美氏

・さつま芋、かぼちゃの苗植え、収穫体験がクッキングやリース作りへ発展した。

・畑でいろいろな野菜を見学したりいちご狩りを楽しんだりしたことが偏食の克服に役立った。

②年長「市民図書館活用」

・必要な本を探すために職員に質問したり子ども同士で協力しＰＣで検索したりした。また、カードを使って本を借りるなど図書館について体験を通して学んだ。

・借りた本を調べ活動に役立て、作品展の制作活動やお遊戯会の演目に役立てた。

③年中「消防署見学」

・東消防署で消防車や訓練の様子を見学し絵に表現した。

④年長「巡視船乗船体験」

・保護者の申し出により、勤務先である青森海上保安部の巡視船ひばかぜ

に乗船した。青森湾から青森市街を眺めたり、マスコットキャラクターとの綱引きをしたりして、ふれ合いを楽しんだ。

（４）コロナ禍でも開催方法を工夫することで、家庭にとって開かれた学校（幼稚園）であることができたと思われる。

①運動会を青森大学の正徳館で行ったり、クラス毎に行事を開催したりすることで、父母、祖父母、兄弟姉妹など家族みんなに子どもの成長を感じてもらうことができた。

②保護者面談の時間を長く設定し情報交換をしたことで、幼稚園と家庭の相互理解がより深まり、園運営に快く協力してもらうことができた。

（５）ＴＶ、新聞活用やホームページのこまめな更新、広報活動の工夫により、令和４年度新規獲得目標１０名を達成した。

・令和５年度中の入園（転園）希望者が、令和４年度末時点で利用定員２５名を上回っている。（２７名）

（６）その他

・幼稚園の感染予防対策に対する保護者の理解と協力により、過去３年間コロナによる休園や学級閉鎖が１度も無かった。

＜人事計画及び施設整備計画＞

（１）一人一人の学ぶ意欲を尊重し希望する研修会への参加を奨励した結果対面及びオンライン研修に延べ３３名（教員数６名）が参加し学んだ。

（２）学年末～学年始めの学級事務スケジュールを明らかにし、期限を守ることや適切に処理することを意識づけた。また、ＩＴの活用により学級事務の効率化を図った。

（３）エアコン５機を設置したことで快適な教育環境が保障され、保護者の安心感につながった。また、設置後の熱中症発症者は０であった。

＜今後の課題＞

・年長「森の冒険」を、年３回の体験活動として単元計画を完成させる。

・年中の地域を活かした体験活動を発掘する。

・留学生支援センターと連携を図り、留学生との異文化交流を促進する。

・主体性を育むための環境設定、日常の教育活動における教師の言葉がけを意識するよう園内研修を進める。

・堤小学校や卒園児の進学先との相互理解、交流が進むよう、園から積極的に働き掛けていく。

・利用定員２５名の充足及び満３才児獲得に努める。

・トイレ工事や雪害箇所の補修工事の早期着工を実現する。

２－８　螢ヶ丘幼稚園

＜事業計画＞

①　螢ヶ丘幼稚園の教育目標の具現化に努め、教育計画や環境の充実を図る。

②　青森山田学園の施設・人材を積極的に活用する。

③　入園志願者の獲得を目指す。

④　子ども理解を深め、教員の資質向上に努める。

＜実施結果＞

①　教育目標の具現化

・新型コロナウィルス感染拡大のため中止になっていた行事は内容を再考し、開催した。特に、運動会、作品展、お遊戯会は一人一人の活躍の場を確保するようにしたことで、子どもも意欲的に取り組んだ。

・行事と関連させた長いスパンで活動計画を立てるようにし、保育環境や支援の工夫をすることで、一人一人が自主的に取り組むと共に、協同的な活動にも結び付いた。

・園の方針や活動を様々な場面で、子どもの姿を通して保護者へ周知し、理解や協力を得た。

・教育目標について、具体的な場面で子どもたちにも考えさせることで、関わり合って仲よく遊ぶことができるようになってきた。しかし、挨拶に関してはまだまだ十分とは言えない。次年度の重点事項とする。

②　青森山田学園の施設・人材の積極的活用

・昨年に引き続き、新型コロナウィルス感染拡大のため、飲食を伴う高校生や大学生との交流はできなかった。しかし、体操、サッカー、スキー、スケート、英語等は教育課程の中に位置づけた。直接指導してもらうことで、満足感や自信に結び付き、他の活動への意欲喚起となった。保護者からも、青森山田学園関連の活動が充実していることが高く評価（保護者アンケート100%肯定）された。

③　入園志願者の獲得

◎　働く保護者を支援するサービスの充実

・スクールバスの運行時間の延長・・・バス利用率60%

朝バス　１回（8：10）、帰りのバス２回（14：00、16：00）

走行範囲の広域化・・・造道、幸畑、筒井、浜館、自由ヶ丘、戸山方面に送迎

・完全給食（週５日）の実施

・預かり保育の充実

延べ人数　1,185 人（無償化率　60%）、長期休業中の弁当の提供 279 食

共働きの保護者のニーズに応えてサービスを充実させ、引き続き働く保護者への支援の仕方を工夫していく。

◎　広報手段の多様化（メディア活用、地域集団活用（回覧板）等）

・チラシ配布地域の広域化・・保護者の協力により配布先を増加（9 カ所）

・インスタグラムの開設・・・行事、日常の保育活動をアップ。閲覧者は増えてきたが、まだまだ工夫の余地がある。

・広報取材・・・体操、スキー、お茶会。５回取材依頼中３件のテレビ放映

◎　未就園児教室・子育て支援の充実　―　月２回に実施（うち１回は体操教室体験）

10 回開催　　参加者　79 人

保護者参加型（ママカフェ）3 回開催　未就園児　13 人　保護者 15 人

入園者　10 月・・・1 名　1 月・・・1 名　令和 5 年度 4 月・・・２名

コロナの感染拡大のため、4 月は中止したが、5 月からは毎月開催した。

参加者の 80%が入園したので、未就園児教室を充実させ、来園してもらうようにしていく。

④　教員の資質向上

◎　子ども主体の活動がなされるような教員の自己研鑽の場

〇園外研修

・青森県教育委員会主催新採用研修会・・・5 月、7 月、9 月、10 月、１月

・特別支援に関わる研修・・・7 月、8 月、9 月、11 月、2 月（6 回中 5 回オンライン）

・青森市私立幼稚園協会夏季・冬季教員研修会・・・8 月、1 月（オンライン）

・青森県教育委員会主催研修会（教育課程）・・・8 月（オンライン）

・青森山田学園幼稚園・こども園合同夏季研修会・・・8 月（オンライン）

・青森県私立幼稚園連合会主催教員研修会（キャリアアップ）・・・１月

・新型コロナウィルスに関わる研修・・・8 月、2 月（オンライン）

・危機管理に関わる研修・・・1 月（オンライン）

〇園内研修

・特別な支援を要するへの対応（外部講師招聘）・・・5 月、11 月

・活動計画の見直し（２学期分）・・・８月、12 月

・研修会への参加報告　・・・　職員会議時、12 月

・活動報告書の作成・・・12 月

園外研修では、オンライン研修が多かったため、、複数回自分の課題に沿った研修を受講することができ、自己研鑽に努めた。

園内研修では教育活動の計画、実践、評価を全員で行うことで、主体的に取り組む活動の工夫や子どもへの支援の仕方を具体的に学び、保育に生かすことができた。

＜今後の課題＞

・教育目標の今年度の重点　挨拶ができる子ども・・・いつでも、どこでも、誰にでもを家庭と連携をしながら具体的な場面で指導

・少人数を活かした指導の充実・・・週 1 回の縦割り活動の位置づけ
異年齢同士が十分関わり合う合同活動の工夫

・学園の人材を生かした体験活動の充実・・・異校種との交流活動（高校、大学）の工夫

・地域との交流・・・地域の人材、施設の活用
学区内の幼保小との連携の仕方の工夫

・園児獲得・・・未就園児教室の充実
本部と連携を取りながら幅広い広報活動を展開し、未就園児の来園者数を増やす工夫

・今後の園の方向性を本部とも確認しながら熟考。

２－９　北園幼稚園

＜事業計画＞

① 子ども一人ひとりの興味関心を大事にするとともに、多様な体験を通して豊かな感性を育て、主体的な活動ができる子どもの育成を目指す。

② 研修会への参加、園内研修の実施を通して教職員の資質の向上と教職員間の共通理解を深める。

③ 未就園児教室、広報活動を通して園児募集を行い、入園者の確保に努める。（利用定員充足率の確保（利用定員 15 名、目標 100%））

＜実施結果＞

① 教育活動

・新型コロナウイルス感染症予防のため観覧人数の制限等、規模を縮小して行った行事もあったが、園内で予定していた行事は実施することができた。

・運動会、アート展（作品展）、お遊戯会などの行事では、『子ども達が自ら考え、相談し合いながら活動を進める』ことをねらいに掲げ、十分時間を

かけて実施した。自分の意見を発表するだけでなく、互いの良さに気づき、認め合う姿が見られるようになってきた。また、年長児が年少児を気遣ったり、年少児が年長児を目標に頑張ったりする姿が見られた。縦割り保育の効果が見られると保護者からも好評である。

・サッカー教室、体操教室、英語教室は予定通りに実施することができ、子ども達も意欲的に取り組んでいた。

・いろいろな野菜の栽培を約半年にわたって行い、植物や昆虫の様子を観察したり、収穫を楽しんだりする姿が見られた。野菜が苦手な子どもも、進んで食するようになり、保護者も喜んでいる。

・公園での清掃活動や遊び・美術館観覧・農業高校でのりんご狩り体験など地域の施設を利用した活動を通して、地域の一員としての意識が持てるようになってきている。

② 教職員の資質の向上

・青森県私立幼稚園教員研修会（8 月）、八戸地区教員研修大会（8 月）、青森山田学園幼稚園・子ども園合同研修会（8 月）、十和田市私立幼稚園協会教員研修会（1 月）、十和田市幼保小連携協議会（9 月・1 月）に参加した。

・園内研修は実施できなかったが、研修会への参加報告や伝達を通して共通理解を図った。

・学期ごとに教育課程の見直しを行い、子ども達の発達に沿った教育活動が展開できるように努めた。

③ 利用定員の確保

・年度途中で入園者（満 3 歳児）が 2 名おり、利用定員 15 名に達することができた。

・新型コロナウイルス感染症の心配から、未就園児教室への参加者は 2～3 名と少なかった。

・ホームページの更新を頻繁に行うようにした。閲覧している保護者、外部の方も多いようであった。評判も良いようである。新聞やテレビ等メディアの活用ができなかった。

＜今後の課題＞

・子どもが主体的に活動できるようさらなる幼児理解に努め、環境構成や言葉がけなどを工夫していく。

・青森山田学園や地域の施設・人材の活用を増やし、子ども達が多様な体験をする機会を増やしていく。

・短時間勤務の教員が多く外部の研修に参加することが難しいので、園内研修を通

して幼児の発達や教育課程について共通理解を図っていく。
・新聞やテレビなどメディアを活用し、教育活動を広く周知して園児獲得につなげていく。
・認定こども園への移行を視野に入れ、2 歳児の一時預かりによる受け入れも進めていく。

２－１０　青森県ヘアアーチスト専門学校

＜事業計画＞

（１）教学計画

①各種認定試験の受験者全員合格

②職業人としての自覚と基本的生活習慣の確立

③国家試験の受験者全員合格

（２）学生確保

①入学者増による定員充足率の向上

②オープンキャンパス・ヘアモードショーの参加者確保

③社会人志願者・入学者獲得

＜実施結果＞

（１）教学計画について

①各種認定試験の受験者全員合格

認定試験結果（SBS、AFT）

	受験級	受験者	合格者	合格率
メイクディレクター	2 級	38	38	100%
ネイルディレクター	1 級	10	10	100%
	2 級	24	24	100%
着付けディレクター	2 級	18	18	100%
	3 級	41	41	100%
接遇・マナーディレクター	3 級	35	35	100%
色彩検定	2 級	5	4	80.0%
	3 級	11	2	18.1%

②職業人としての自覚と基本的生活習慣の確立

新型コロナウイルス感染症の影響で様々な予定されていた行事等中止となったが、将来、理美容業に携わる職業人となることを自覚し、自らの意思で基本的生活習慣の確立を図った

③国家試験の受験者全員合格

第 47 回理容師・美容師国家試験結果

	受験者	合格者	合格率
理容師	3 名	2 名	66.6%
美容師	32 名	29 名	90.6%

今年度は残念ながら卒業生全員合格とはならなかった。

来年度は理容科、美容科ともに合格率 100%の達成を目指す

（２）学生確保について

①入学者増による定員充足率の向上を図った

1）重点地区高校訪問により学校説明及び募集活動の実施

2）県や媒体業者が主催する進学相談会、校内ガイダンス等へ参加し本校の魅力発信を行った

3）新型コロナウイルス感染症により大規模な進学ガイダンスが中止となることがあった

②オープンキャンパス・ヘアモードショーの参加者確保

1）オープンキャンパス

年 2 回（6 月・8 月）開催、高校訪問でポスター及びチラシの配布、進路ガイダンス等で直接高校生へ案内した。また、ホームページで開催案内し参加者を募り実施した。

・参加者

6 月 11 日（土）21 名

8 月　6 日（土）35 名

2）ヘアモードショー

9 月 22 日（木）に新型コロナウイルス感染症の影響もあり、規模を縮小して来場者 103 名で実施した。

③社会人志願者・入学者獲得

職業訓練受講給付金制度の長期高度人材育成コースを活用し、社会人入学者を獲得するため、ハローワークや弘前高等技術専門校と連携をとり社会人入学者の確保に努めた。

＜今後の課題＞

（１）学生確保

①年度別に入学者数が上下するため、継続して定員数に近い学生の確保が必要

②オープンキャンパスやヘアモードショーの参加者確保。また、参加していない高校生へどれだけ本校に目を向けさせるか。

③青森県内高等学校の統合が急速に進んでいることから、高校生の数が減少していく中での入学者確保

☆地域別入学者数

地区	R1	R2	R3	R4
中南地区	27	20	22	33
西北地区	8	7	8	3
東青地区	6	5	8	6
秋田県北	2		1	1
その他	1			1
計	44	32	39	44

（２）入学定員充足率の向上

①定員数を確保しどれだけ充足率を向上できるか

②美容科は定員に近い入学者を確保しているが、理容科は希望者が減少傾向にあるため社会人入学者の獲得

☆年度別入学定員充足率

	R1	R2	R3	R4
理容科(20 名)	5(2)	5(4)	4	5
美容科(40 名)	39(4)	27(1)	35(2)	39(4)
入学者計	44(6)	32(5)	39(2)	44(4)
入学定員充足率(%)	73.3	53.3	65.0	73.3

（３）施設整備計画

①学校表示板のリニューアル（経年劣化の修復）

②実習室の整備（実習台等の入替）

③エアコンの設置（教室、校長室、応接室）

３．財務の概要

別紙「令和 4 年度計算書類」参照